

一般質問通告書

受領日時 令和5年11月27日 午前11時30分

7番 氏名 佐々木仁茂

質問項目	質問の要旨
1、疲弊する農家の現状に支援と対応を	<p>(1) 令和3年米価の下落、令和4年県中央部作況指数94の不良、令和5年県中央部作況指数95のやや不良、この様に農家経済は3年連続大きな損失と影響を受けた。</p> <p>さらに追い打ちをかけるように、7月の豪雨災害で被災した農業法人や農家は経営的に、厳しい現実を突きつけられている。これまでいくつかの支援策が講じられてきたが、疲弊し次年度の生産意欲を無くしかけている法人や農家の現状を、町はどのように捉え、再生産を後押しするための支援策を打ち出す考えはあるのか。</p> <p>(2) 7月の豪雨災害で被災した農地の現状復旧工事が進められている。広範囲に被災農地があり、農家は工事の進捗状況を気にしながら、来春の作付けに間に合うのか心配している。復旧工事の今後の見通しは。また今回の災害では、水利施設の被害が、後の稲の生育に影響を及ぼした。用水確保に支障が及ばない、強靱な水利施設の設置を後押しすべきではないか。</p> <p>(3) 7月の豪雨災害では、農地へ土砂とともに流入した1本まるごとの流木の数が多かったことが特徴に挙げられる。この原因は川の上流部の増水により、川岸に立つ樹木が根こそぎ流されたものと、急峻な護岸部分に立つ樹木が大雨によりずり落ちたものと推測される。</p> <p>樹木の流入は、水の流れを阻害するとともに、川に作られた構造物へ大きなダメージを与える要因となる。今後も大雨による災害が発生する可能性が十分考えられる今、このことについて調査と対応を県に要望すべきではないか。</p>

<p>2、戸村堰の認識について</p>	<p>(1) 戸村堰の歴史は古く、江戸時代初期、佐竹藩が家臣扶養の経済確立のために行った新田開発に起因している。馬場目川北側の低地開田事業に伴う戸村堰の開削工事は、1604年から始まり、紆余曲折を経て佐竹藩横手城代である戸村十太夫により1624年に完成した。水路名は最後の指揮を執った戸村十太夫の名を取り、戸村堰と呼ばれた。</p> <p>時代の変遷とともに灌漑の方式が変わり、現在は上横止頭首工より取水し、コンクリートフリームの水路に流し本町部を経由して、戸村揚水機場よりパイプラインへ圧送し灌漑している。近年豪雨災害が発生するたびに戸村堰のことが取り沙汰される。用水確保のための水路であり、灌漑が終了した期間や大雨時には適切な対応をしている。町民の誤解を解くためにも、町の戸村堰に対する認識を問う。</p>
<p>3、旧五城目小学校跡地に残された石碑について</p>	<p>(1) 7月の豪雨災害発生後、二カ所の災害ゴミ仮置き場を視察した際、旧五城目小学校跡地に校歌が刻まれた石碑が残されていることに気がついた。まるで災害ゴミに飲み込まれそうな状況を見て心を痛めた。</p> <p>何故、令和3年1月の新校舎開校に合わせて石碑を移転しなかったのか。視察した後日、石碑の移転計画があると耳にしたが、今後のスケジュールはどうなっているのか。移転の場所はどこなのか。また児童たちにはどのような説明をするのか伺う。</p>
<p>4、方言を学校教育で活用しよう</p>	<p>(1) 方言には温かみがあり、人の心を和ませる力がある。地域の歴史や風土、暮らしを映し出す「文化財」といえる。近年、共通語の浸透により、子供や若者を中心に方言が使われなくなった。この様な中、幸いなことに五城目町民は、広報五城目に連載されている大石清美さんの「なつかしのごじょうめのわらしだ」を見て、懐かしさとほのぼのとした笑いをもらっている。</p> <p>国連教育科学文化機関（ユネスコ）が、2009年に、消滅する危険があるとされる世界約2500の言語を発表している。中にはアイヌ語や八丈島、奄美・沖縄など南西諸島など八つの言語が含まれていた。以来、国内では方言の価値を見直し、次代に伝えようという気運が高まってきた。本町の児童、生徒にも方言にまつわる教材を提供し、方言の持つ面白さや楽しさを伝え、言葉に愛着を持ってもらい、さらには地域への愛着につながるような学習の時間を設けるべきではないか。</p>

<p>5、学校菜園について</p>	<p>(1) 学校菜園は児童たちにとって「自分らしく心地よい」と思える場所であって欲しい。野外教室ともいえる菜園は、地域とつながる豊かな活動の場でもある。学校と児童たち保護者、地域がつながり、共に汗を流し喜びを共有することが、学校活動全体に良い影響を及ぼすことと思う。</p> <p>今年の菜園での活動を児童たちは、どんな感想を持ったのか。また学校は今後、菜園の取り組みをどのように進めていくのか。</p>
<p>6、ふるさと五城目会への支援について</p>	<p>(1) 去る11月5日に東京で開催された「ふるさと五城目会」の総会に参加し、複数の会員と懇談した際、異口同音に会員から出た言葉は、現役世代の会への加入が少なく、会員の高齢化が進み会員が減少している。このままでは会の運営が厳しくなるとのことだった。これまで「ふるさと五城目会」は、本町と首都圏を結ぶ活動や千代田区との姉妹都市提携に多大な貢献をしてきた。「ふるさと五城目会」のさらなる発展と存続のために支援すべきと思うが、町の考えを伺う。</p>